

1 はじめに

日本の教育現場においていじめの問題がクローズアップされるようになってから久しいが、いじめ事案がなくなる兆しは無く、依然として学校現場では教員が多く的事案への対応にあたっている。そんな中で、文部科学省から学校いじめ防止基本方針を策定することを通知され、各学校で改めてその対策を立て直し、実践しようとしているところである。

いじめは学校だけの問題ではなく、社会全体の問題であり、人間の本質的な問題でもある。この問題を解決していくためには、いじめの防止等のための対策だけではなく、その地域の歴史的背景や社会情勢などを含めて考えていく必要がある。

そこで今回の海外派遣ではフィンランド社会の現状やそれを踏まえたいじめの現状、さらにはその対策を「Kiva プログラム」を中心に見聞し、日本のいじめ問題を別の角度から考えていくことができるようになることを目的とした。

2 フィンランドの教育状況

フィンランドは人口が少なく、資源も少ない。また工業もあまり盛んではないため、以前から国をどのように成り立たせていくかが重要な課題であった。そこで政府は国として教育に力を入れることで、「人材の育成」を重要な施策としてきた。

教育理念は「全ての就学義務のある児童・生徒に対して平等に教育を与えられ、教育を受けることができる」としており、学用品なども無償とし、児童・生徒は一人一人が格差の無い状態で教育を受けることができている。

国は「コアカリキュラム」と呼ばれる教育の根幹となる方針を示し、そのコアカリキュラムにしたがって各自治体が独自の教育課程を編成し、それを受けて各学校が特色ある教育課程の編成を行っている。

そして、日本に比べ校長の権限がとて大きく、学校の設計から教職員の雇用、遊具の設置など、配分予算の中で自由に活用できるようになっており、特色化が図りやすい体制ができている。また、教員は全員が大学の修士課程を修了しており、地域や保護者からの信頼が厚い。さらに、校長や教職員の人事異動が原則無いため、何年も同じ学校に在籍している教職員が多い。

これらの制度を背景として、学校は地域のコミュニティの中心的な役割を果たしており、地域社会や家庭との厚い信頼関係が形成されている。

そんなフィンランドでも近年は社会全体に少子化が進み、兄弟の少ない児童・生徒が増えてきた。それに伴い児童・生徒のコミュニケーション能力の低下が問題となり、学校においていじめの問題が表面化してきている。

また、多民族化も進んできたことで、児童・生徒の中に「人種」「強者と弱者」などの観念が多く出てくるようになったこともいじめを増加させていった要因の一つと考えられている。

これらの背景を受け、フィンランド政府はいじめ防止に本格的に取り組むようになり、トゥルク大学と国で共同開発を行ったいじめ対策プログラム「Kiva プログラム」が開発されたのである。

3 学校訪問をして

(1) レコランマキ小学校

バンター市郊外の豊かな自然に囲まれた環境にあり、全校児童 355 名、全校児童の 25%が発達障害、25%が移民児童。

学校の理念として「児童生徒が社会的能力を身に付けながら、尊敬し合う心を身につける。また、人生において自立・自律した能力を身につける。」ということを掲げている。

いじめ対策として「Kiva プログラム」を実施しており、6名の教師が Kiva チームを編成し、休

み時間のパトロール活動やいじめ発見時にはSSW（スクールソーシャルワーカー 以下SSWと表記）や担任との連携をとっている。校庭で遊ぶ児童の様子を見ながら、「泣いている児童」や「けんかをしている児童」などの発見にあたっている。



【レコランマキ小学校の様子】

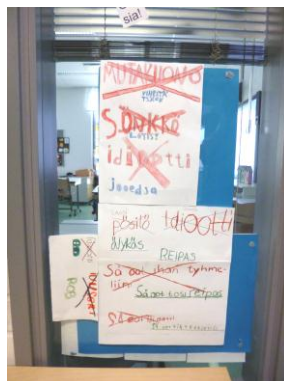
いじめを発見した場合は、①いじめられた児童からの聞き取りをする。②いじめを行った児童・いじめを認識していた児童・傍観していた児童からの聞き取りを行う。その際は、「あなたは何をしたのか」を中心に聞き取り「誰が…」といったことについては聞かない。次にいじめが明白になった場合は、③児童に契約書を書かせる。④2・3週間の追跡調査を行い、上記児童から再度聞き取りを行う。⑤問題がなければ全員に確認して問題解決を図る。⑥解決しなかった場合は保護者に連絡をする。という段階を踏んで介入を行っている。

また、特徴的なのは、いじめを発見した場合にはKivaチームが担任とSSWに連絡を入れ、SSWが中心となって対応にあたる点である。担任が関係した児童からの聞き取りや、保護者との連携、事後の見守りの全てを行うのではなく、「いじめ対策チーム」としてシステムティックに支援体制を機能させていくことで、より客観的・効率的に対応することができるのである。

特にSSWは、各学校に1名配置されており、どの学校においても中心的な役割を果たしている。SSWは保護者との連携だけではなく、必要に応じて児童相談所や警察などの関係機関との連携の役割を担っている。これによって、担任の負担も軽減されている。

また、校内にはいじめに関する様々な掲示物が

貼られている。日本でも学習している「ふわふわ



言葉・チクチク言葉」などが掲示されており、児童に対して日常的にいじめ防止に対する意識の向上を図ろうとするねらいがうかがえる。

また、「Kivaプログラム」の公式ポスターも随

所に貼られており、学校にも地域社会にも「いじめは絶対に許さない！」という意識を根付かせていくための努力を行っていることが、いじめの防止の効果となって表れている。

4 研修成果の活用

フィンランドの「Kivaプログラム」で行われている授業の内容は日本で行われている道徳や学級活動での構成的グループエンカウンターなどとほぼ同じである。それらはいじめに特化した形でプログラム化したものである。

また、休み時間の様子を観察し、早期発見に努めることや、発見後に早急に児童・生徒に対して聞き取りなどの介入を行うことなども大きな違いは無い。

しかし大きく異なる点として、一つは「地域や保護者と学校との連携の強さが根底にあること」である。プレスクールでの幼児教育に始まり、入学説明会でいじめについての共通理解を図り、互いの信頼関係の上でいじめに介入していくことで、児童・生徒の周囲にいる大人のいじめに対するスタンスにぶれが生じないのである。

これはいじめに対する対応だけではなく、児童・生徒を育てるということに対しても学校を中心とした地域全体で対応するという体制ができているのである。

二つ目は「SSWを中心としたシステムティックな対応」である。担任が全てを抱え込んでしまうのではなく、チームによる対応が、担任の負担を軽減し、いじめ問題への対応において効果をあげていると考えられる。

訪 問 国：ドイツ

研修テーマ：生徒指導・教育相談の充実

所属名 千葉市立松ヶ丘中学校

氏 名 岩 脇 之 俊

1 はじめに

平成 26 年 10 月 13 日から 24 日までの 12 日間、千葉市教員等海外派遣研修事業（独立行政法人教員研修センター教育課題研修指導者海外派遣プログラム）の研修者として、ドイツ連邦共和国を訪問した。生徒指導・教育相談の充実というテーマについて視察し、成果と課題を把握することによって、千葉市の学校教育の課題である「いじめや暴力行為等の防止・解消を図る心の教育の充実」に向けての手立てを探りたいと考えた。

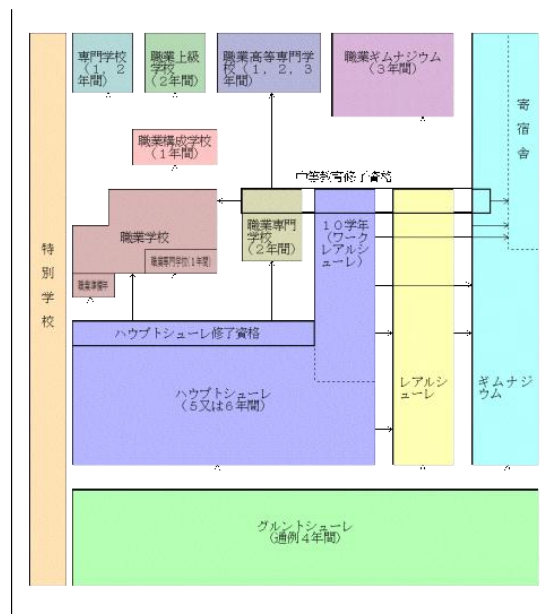
2 ドイツの教育状況（教育制度）

ドイツは 16 の州からなる連邦制の国家であり、教育に関する権限は各州が有している。各州に文部省が置かれ、州ごとに、設置する学校種や就業年数、学習指導要領などを定めている。そのため教育政策の調整などを目的として、各州文部大臣会議が、毎月ベルリン市で開催されている。

義務教育は満 6 歳から 9 年間（一部の州で 10 年間）となっており、児童は通常、満 6 歳になるとグルントシューレ（基礎学校）に入学し、初等教育を受ける。グルントシューレ修了後は児童の成績や保護者の希望などにより、中等教育の進学先を選択する。学校制度は複線型であり、中等教育で設置されている学校は州によって異なる。ここではベルリン市（州）について例を挙げる。

グルントシューレは 6 年間であるが、児童の能力や保護者の希望、学校の考えなどにより満 5 歳で入学したり、4 年間で修了することもある。グルントシューレ修了後は、インテグレートゼクンダールシューレまたはギムナジウムに進学する。

また、保護者の希望などにより、1 年生からゲマインシャフトシューレ（共同社会学校）に入学し、10 学年または 12、13 学年まで学ぶことができる。この学校ではプロジェクトワークに重点を置いており、学年をまたがった授業も行われている。



3 学校訪問をして

（1）ランドウ・グルントシューレ（小学校）

① バディプログラム

バディプログラムとは、生徒による支え合いシステムで、ベルリン州では多くのグルントシューレでバディプログラムを実施している。

4 年生以上の上級生が学習面や生活面で下級生の面倒を見るという、



学習バディ

全校あげての実践は、相互の信頼関係づくりや安心して生活できる環境づくりに資するとともに、いじめを許さない校風づくりに寄与している。

バディは、役割に応じていくつかの種類に分けられる。一つは学習バディである。4 年生以上の上級生が 3 年生以下の下級生の授業に参加し、学習支援に当たるものである。難しい問題を教えるというよりは、作業を手伝ったり一緒に体を動かしたりすることで、信頼関係を構築するのに役立つ。

っていた。もう一つはブレイク(休み時間)バディである。ブレイクバディは休み時間になるとバディを示すパーカーを身に付け玄関に出る。ドアの前に立ち、グラウンドに出ることを促したり、校庭にお菓子のゴミを散らかしたりしないように見守ったりしている。

このプログラムの特徴は、あくまで児童が自主的に考え、行動することであるが、それを支えるのは教職員の合意形成に基づく共通した取組であり、そのことがバディという活動に価値を与えていると考えられる。

② 「争いパイロット」の誕生

悪ふざけから、乱暴な行為がエスカレートした際、それを止めるために「これ以上は止めて！」と宣言する「ストップルール」が2009年に導入された。相手の行為に対して嫌だという意思表示をし、その行為を止めなければならないというルールである。このルールをラップ調の歌にして、ダンスしながら全校で歌うというユニークな取組も行われている。このルールができたことを機に、新たなバディとして休み時間中の乱暴な行為やけんかを仲裁する「争いパイロット」が誕生した。争いパイロットには選考委員会があり、5年生以上で専門的なトレーニングを受ける必要がある。

(2) フリッツロイター・オーバーシュール (上級学校)

① 学級委員会での取組

8～10年生までの学級で学級委員会を実施している。これは、学級委員が進行役を務め、学級内の問題の改善



学級委員会の様子(9年生)

について生徒同士で話し合う場であり、特定の生徒の喫煙や授業時の携帯電話の使用等、規律違反の問題を扱う。日本では、教育的配慮から特定の個人名を挙げて議題にすることは控えるが、会議の中では、実名をあげて、学級で起こった諸問題について話し合いをしている。実名をあげることで、生徒は共同生活におけるルールの重要性と違反した場合の自己責任を学び、改善を促すと考えられている。ルールは生徒同士で作られ、保護者にも伝えている。こうした建設的な話し合いは、いじめの防止にも効果があると考えられている。

② 「流水綱渡りゲーム」を通じた授業

訪問したときは欧州では新学期で、新入生を対象として人間関係を深める授業を行っていた。ゲームの内容は、海に浮かんだ氷に飛び移りながら向こう岸までたどり着くゲームで、チーム対抗で早さを競う。氷は数が少ないので、先へ先へと動かしながら飛び移らなければならない。アイディアを出す者、方針をまとめる者、指示をするものなどがいて、仲間が共通理解をして初めて早くたどりつけるように考えられたゲームである。このゲームを繰り返すことによって仲間関係をより良いものにしていくことが目的である。

4 研修成果の活用

ドイツと日本のいじめを比べてみると、児童生徒の人種・民族・宗教などの違いはあるが、いじめの種類などを見る限りでは、それほどの違いは感じられない。日本では、いじめなどのトラブルが発生すると、その原因の解明や加害者の指導、被害者へのケアが中心となって多くの時間が割かれてきたが、ドイツでは、いじめやトラブルを未然に防ぐための活動に重きをおいている。

今回の視察で、いじめを予防するために、

- ・集団内においては個人のわがままな言動で他者に迷惑をかけることは許されない。
 - ・集団内では集団の質の向上に気を配る。
 - ・力のある者は弱い立場の者を助けるべきである。
 - ・誰でも困ったことがあったら、他者に相談できる権利がある。
 - ・皆のために役立つ行為は賞賛されるべきである。
- ということが強調されていた。この指導は日本でも同じで、千葉市の生徒指導の重点にも「児童生徒相互の好ましい人間関係の確立」と示されているように、教師の指導のもと、子ども同士でトラブルを未然に解決できるような集団を育てていく必要がある。